

何の問題ではないはずである。これはすでに都留教授によって提起された問題であるが、今後粗概念を用い、しかも可變資本部分を考慮しながら、近代經濟學の國民所得分析の成果を利用せんとする場合には必ず通過しなければならない難關の一つであろう。かくて本書はこのような企圖をもって、概念の規定から、モデルの形成を経て景氣循環の説明に至るまで一貫させた先驅的な問題提起的な書物といってよいだろう。この意味において本書は正に一讀に値する勞作である。 妄言多謝。

(宮崎義一)

セルゲー・プロコポヴィツ

『ソ連邦の第四次五カ年計畫』

Prokopovicz, S. N.: Der Vierte Fünfjahrplan der Sowjetunion 1946—1950. Zürich u. Wien, 1948.

I

本書は 1948 年の出版で、おそらく、著者のソ連經濟書としてもっとも新しいものであろう。「戦後ソ連經濟の復興と發展」、したがってまた、「ソ連邦經濟の現段階」の分析という、いまのわれわれにとってきわめて切實な研究テーマを遂行するための一つの参考文獻をなしている。しかも、このテーマについてはおそらく、われわれが手にしうるほとんど唯一の(といつてもいい)ドイツ語文獻であるという點が、かなり多くの人々の興味をそそのめるのではあるまいか。

いま、本書を一通り讀み終つてえた結論からさきに言ふと、本書は、ソヴェート經濟についての初歩の研究者にはむかない。このテーマについてロシア語や英語で書かれた文獻を利用しうる研究者が、参考文獻として利用するといふのであれば、若干の利用價值はあろう。その理由はいろいろあるが、第 1 に、著者が、(あとでも書くように)政治的に札つきの人物で、その判断は、いわゆる「自由世界」的な意味でも中正不偏とはいいがたいからである。第 2 に、この本は、1948 年の出版であるが、執筆されたのは、1946 年頃であろうと思われる。すでに、われわれ自身が研究に使用しうる直接的な資料として、5 年計畫の遂行實績、更には、1951 年の實績について、ソヴェート政府發表の原文を入手しうるのであるから、本書は既に資料的に古くなっている。そういう意味では本書の表題は必ずしも内容に即してはいない。むしろ『第 4 次 5 年計畫の出發點』とすべきであろう。第 3 に、個々の瑣末な點はぬきにして、この程度の範圍

の資料ならば、われわれ自身も利用しうるものばかりで、本書をよんでみて、ドップ、パイコフ、乃至、最近のアメリカの研究書を讀んだ場合にわれわれが感ぜざるをえない緊迫感、資料的にわれわれよりも遙かに廣い基礎の上で仕事をしているという感じ、はうけない。そういう意味で、教えられることも刺激をうける點も少い。

それでは、全然仕様のない本かといへば、必ずしもそうではない。——第 1 に、さきにも書いたように、ソ連邦戦後經濟の現段階についての研究をする場合には、本書の表題からしても、一應は目を通しておかねばならないという消極的な意味がひとつと、第 2 に、いまの日本の多くのソ連研究家が、餘りにもソ連資料に忠實で、何等の批判もないことをあきたらないと思っている人達に對してならば、この本は、ソ連資料をもとにして、或る程度の「分析」乃至「批判」をしているので、そういう意味での「材料」の役目は果してくれらると思う。そういうネガティブな意味では、「ソ連一邊倒」のソ連研究家も、目を通しておいて損はない。但し、問題へのアプローチがかなり古びていたり、立言についてそれを立證する資料をあげていなかったりするうらみがないでもない。

II

著者セルゲー・プロコポヴィツ (Сергей Николаевич Прокопович) は 1871 年生れのロシア人である。1871 年生れといへば、今年 81 歳の高齡である。はじめ右派「經濟主義」のイデオログでロシアにおけるベルンシュタイン主義(修正主義)の擔い手として活動し(この點については、レーニンの『何をなすべきか』1908 年を参照せよ)、のちに自由主義の立場に移行した。1906 年にはカデット(立憲民主黨)の中央委員となり、1917 年の 3 月革命後のケレンスキー首班の臨時政府には、はじめ商工大臣、のちに食糧大臣をつとめ、(この點については、レーニンの『迫り来る破局、いかにしてこれとたたかうべきか』1917 年を参照せよ)、その當時までに、ロシア語で多くの著書を出版している。それらは、次の如くである。——西ヨーロッパの労働運動、第 1 ドイツおよびベルギー Рабочее движение на Западе. I Германия и Бельгия. 1899г.; 社會主義の諸問題 Проблемы социализма. (發行年次不詳); マルクス批判 К критике Маркса. 1901 г.; ドイツにおける労働運動 Рабочее движение в Германии, переизд. в 1908 г.; 農業恐慌と政府の施策 Аграрный кризис и мероприятия правительства, 1912 г.; 戦争と國民經濟 Война и народное хозяйство, 1918 г. 他に、ゾンバルト、ウェーバー、ヤッフエの編集にかかる、《Archiv für So-

zialwissenschaft und Sozialpolitik》の〈Ergänzungsheft X〉として、次のものがある。《Über die Bedingungen der industriellen Entwicklung Russlands. Tübingen, 1913.》

以上の彼の経歴が示すように、ソヴェート政權成立後、彼は當然國內にとどまりえない人物であった。彼は、1921年には難民救済委員会(Общественный комитет помощи голодающим)に入り、1922年6月に(Cf. Harry Schwartz: The Soviet Economy, 1949, p. 18)國外へ追放された。1939年の《ソヴェート小百科辭典第2版》は、彼について、「經濟學者、ロシアにおけるブルジョア自由主義の主要な代表者、ポリシェヴィズムおよびソヴェート政權のはげしい敵」と書いており(Малая Советская Энциклопедия, второе издание, т. 8, 1939 г.), ポリシェヴィキが彼に抱いているはげしい敵意がこれによってもうかがわれる。しかも面白いことには右の《小百科辭典》の第1版(1930年)にはそれほどまでに激しい表現はないのであって、この點から見ると、第1版(1930年)から第2版(1939年)までの9年間に、反ポリシェヴィキの闘士としての彼の「格づけ」がひどくあがっているようである。そしてそのような「格上げ」の原因が、主として、著者の、國外における執筆・出版活動にあったのではないかと想像されるのである。本書を読む場合にもこのような事情が注意されるべきであろう。——著者は、祖國をみすててから、今日までの間に、次のような書物を出している。農家經濟 Крестьянское хозяйство, Berlin 1923 ; The Economic Condition of Soviet Russia. London 1924; ロシアの國民所得に関する研究 Memorandum No.3 (Nov. 1931) of the Birmingham Bureau of Research on Russian Economic Conditions, Dept. of Russia, University of Birmingham, 1931; Die natürlichen Hilfsquellen der UdSSR. Zürich & N. Y., 1944; Russlands Volkswirtschaft unter den Sowjets, übert. von W. Jollos. Zürich & N. Y., 1944.

III

本書は全部で、152頁の小冊子で、行文もやさしく読み上げるのに大した手間はかからない。(Russlands Volkswirtschaft unter den Sowjets.の方はロシア語書きの原稿を W. Jollos がほんやくしたと断つているが、本書もおそらくそうしたものではなからうか。)全體が、次の4章にわかれている。——第1章 戦後の國民經濟の状態、第2章 ソ連邦における國民經濟の計畫制度、第3章 農業の復興と發展、第4章 工業、運輸、商業

の復興と發展。これに、6頁分の「附録」がついているが、この「附録」はヴォズネSENSキーの『祖國戦争期におけるソ連邦の戦時經濟』(1947年)の紹介である。

さきにも書いたように、何とかして、ソ連邦の經濟を批判しようという熱意がいたる處に出ているが、公平に言って成功していない。實例を挙げよう。

第1. ソ連の工業生産總額について、革命前(1913年)と最近とを比較すると、第4次5ヵ年計畫の目標數字(1950年)で12.7倍、實績で14.8倍、1951年の實績で17.2倍になる。(vgl. S. 94——著者のあげているのは目標數字だけである。)この點を著者は否定的に説明しようとしている。著者の説明によると、第1に、從來「工業」にいれられていなかった活動——漁撈、毛皮をとるための狩獵、木材の伐採、蜜蜂からの蜜や蠟の採取、茸や漿果の採取、精粉、碾割、精油、製麻、棉花の精製、家禽家畜の屠殺、等々——が、革命後には工業として統計の中へいれられたこと；第2に、農産物がすべて工業の原料として初歩的な加工の後で工業製品の中へ加えられていること；第3に、從來、家庭内で行われていた製パン、調理、はた織、仕立、靴直し等々が獨立の營業となり、工業統計へ編入されたこと；以上の3つが工業生産額を過大に評價させた原因であるとし、「産業構造や、統計によつて把握される生産物が、このように變化している場合には、總生産についての統計數字は産業發展の動態の正確な姿を示すことはできない」(S. 95)と斷定する。こういう立論は、ソヴェート經濟についての外國側の文獻を少々でもよんだ人には目新しい議論ではない。(拙稿「2つの體制と經濟統計の問題」『經濟研究』1の1號、参照)、それだけではなく、戦後のソ連經濟の説明としては、むしろ、場違いと言わざるをえまい。

第2. 著者は、第2章で、自由經濟と計畫經濟との比較にかなりの頁を費しているが、この部分は、いわゆる「經濟計算論」としてわれわれにはおなじみの議論で、本書は、その立論の仕方を一步も出ず、むしろ後退しているくらいである。われわれに少しでも興味のある點というと、第1に、ソ連のインテリゲンチヤ乃至技師の中で、産業關係各省の役人や、産業企業の管理部に働く人間の割合が高く、直接の生産現場で働く人間の割合が低いことを具體的にのべている箇所(S. 49)と；第2に、1932年と1937年とについて、計畫と實績とを對比して、計畫の遂行率の低さを論證しようとしている點(S. 52 ff. 特にS. 53の表)とである。第1について言うと、資本主義諸國との比較において、特に、ソ連における現業技師(生産現場で直接生産に當る技師)の割合が低いとはいえないと思う。第2の點は、著者がソ連における計

畫原理についての若干の論議をてんで無視してかかっており、ここで著者があげているソ連の計畫制度の缺陷(vgl. SS. 52-3)は思いつきとしか言えない程度のもので、問題にもならない。しかも、こういう種類の退屈な敘述をながながと讀まされたあとで、第2章の最終部、文字通り最終部で、「以上は戦前のことであるが、戦後も何等の改善がなされていないことはたしかである」という意味のことが書いてある(S. 54)のをよむと、思わず、表題をもう一度見直したくなってしまうのである。

缺點ばかり擧げているうちに、餘白がなくなつた。まだまだ澤山あるが、もうここいらで切り上げておく。批判ばかりしてしまったので、味も素っ氣もない書評になつてしまった程であるが、ドイツ語や英語だけでソ連經濟を研究しようという人のために、本書については、この程度の豫備知識がむしろ必要であろう。本書の中で若干なりとも利用しうる材料は、私の今後のポジティブな研究の中で使つて行くつもりである。したがって、ここでは省いておく。

(野々村一雄)

ジョーン・ロビンソン

『經濟學論文集』

Robinson, Joan: Collected Economic Papers.
Oxford, 1951. xii, 236 p.

この論文集はジョーン・ロビンソン夫人の學生時代(1922年入學)から最近にいたるまでの著作の内16篇の論文と9篇の書評(内未發表論文2篇)からなり、彼女の研究の諸段階に應じて5部に分類されている。30年の彼女の歩みをこの論文集によってあとずけてみよう。經濟學におけるケムブリッジの地位の故に、またケムブリッジ内において現實感覺に優れた彼女なるが故に、彼女の遍歴は彼女の高調な筆致と相俟って強い感銘と深い反省を與えている。

1920年代前期には、英國の輝かしい黄金時代はすでに去り、一部識者は暗澹たる前途を憂えたのであったが、なおその餘光は西天を薄紅に彩っていた。その餘光の中にマーシャル(1842-1924)の王座は揺るがなかった。彼女は當時をこう回想している。「マーシャルの原理はバイブルであり、われわれはそれ以上には何も知らなかった。ジェボンズ、クールノー、そしてリカードすら脚註の名前にすぎなかった。パレートの法則は聞いてはいたが、一般均衡の體系については何事も知らなかった。スエーデンはカッセルによって、アメリカはアーヴィング・フィッシャーによって代表されていた。オーストリ

ー、ドイツはほとんど知られていなかった。マーシャルが經濟學であった」(序文)。彼女は在學中にマーシャルの解説『美女と野獸』(第5部)を書いている。

1929年に彼女が母校に講師として歸った時「スラッファ氏の講義はわれわれの島國根性を追出しつつあった。彼女はマーシャルの矛盾を指摘するという演聖罪を犯しつつあった。年長者達はできるだけマーシャルを擁護して對抗した。しかし若い世代は彼等に説得されはしなかった。靜態的基盤と動態的上部構造との矛盾は餘りにも明らかとなった」(序文)。マーシャルの核心を靜態理論の論理體系に織込む努力を續けていたピグーに従って、彼女は『不完全競争の經濟學』(1933年)を發表した。『オイラーの定理と分配問題』以下6篇(第1部)はこの線にそう研究である。獨占の問題をひっさげて彗星の如く登場した彼女の成功はまことにめざましく、シュムペーターをして「ロビンソン夫人は賞讃すべき構想を立てることによって、彼女自身よきマーシャルリアンであることを示し、同時に優れて獨創的な經濟學者であることを示した」と激賞せしめた(『十大經濟學者』邦譯152頁)。

それにもかかわらず彼女は「この點に關して私は悪しき轉換をした」(序文)と告白する。現在の彼女にとって、微細な問題の優美な説明にふけり過ぎた靜態分析と理論からはおよそかけ離れた近代世界の不愉快な現實との距離は經濟理論の致命傷と見られるのである。彼女を獨占の問題から失業問題へ導いたものは14%(1921-38年平均)に及んだ失業率を生んだ恐慌と彼女の第二の師ケインズであった(p. 106)。

「1922年に貨幣の分野では數量説が優勢だった。現實の世界では失業は重くしい問題であったが、理論は失業にほとんど言及するところがなかった。1929年にケインズは『貨幣論』(1930年)の校正刷で講義していた」(序文)。翌年末に『貨幣論』が出版されるや、これをめぐって熱狂的論争がまきおこった。彼女は二つの高名な論文を發表した。その一つの『貯蓄と投資についての寓話』(*Economica*, Feb. 1933)はケインズ利潤論の解明を企てたものである(彼女によればこの論文は31年夏に書かれたとのこと)。他は『貨幣の理論と産出量の分析』(第2部)である。そこで彼女が「貨幣理論は最近激しい革命をとげた。それは貨幣の理論たることをやめて、産出量の分析となった」(p. 52)ことを指摘し、ケインズ自身彼が産出量の分析を書いたのだという事實を看過したと評する時、彼女は一般理論を先驅していたのである。クラインはこの二つの論文の意義を評價して「ロビンソン夫人は『雇用、利子及び貨幣の一般理論』の眞に